
儀式の夜

白亜零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

儀式の夜

【Zマーク】

Z8089X

【作者名】

白里零

【あらすじ】

ある高校に通っている、女子高生の黒輝禮夜。
いつもの様に退屈な日々を過ごしていた。

しかし、ある日を境にして起きる殺人事件。
これからどうなってしまうのか…

01 (前書き)

初めまして。

初めて書く小説なので、誤字なども多かしませんが、読んでくれると幸いです。

予定が狂わない限り、土曜日に更新します。

曇っていた。

今にも雨が降り出しそうな梅雨空を黒輝禮夜は眺めていた。名前でよく勘違いされるが、一応女だ。

正直言つて、つまらない。何もかも。高校生活も思つたより楽しくなかつた。今行つてゐる授業の物理は特におもしろくない。この先生の授業は長いし同じことを何回も繰り返して説明する。しかも生徒いじめをすることで校内の生徒の中でも有名だ。かなりたちの悪い奴と言える。

こいつの名前は悪谷。勿論、生徒たちには嫌われている。正直言つて、眠い。今すぐにでも眠れる。

でも、こいつの授業じゃ眠れない。理由は…

「おこーそこで寝てはいるのはだれだ！河崎かー河崎、お前にこの問題解いてみろー！」

「えーえつ…と…」

「まあこいつになるとなるからだ。ちなみに河崎のフルネームは河崎伸太わさきしんたである。

「もう、いい！後で職員室に来い！…じゃあ黒輝、お前答えてみろ！」

こっちに矛先が回つてきた。ぼけーっとしていたからだろうか。とりあえず立つ。しかし問題なんて聞いて無い。黒板にも書いていない。どうやら悪谷が消したらしい。この野郎。

禮夜は心の中で悪谷に悪態をついた。しかし今はそれどころではない

い。二つの問題には答えないと評定を下されるのだ。そのため問題には答えないとやばい。でも聞いて無かったから答えない。この場合せざうすればよこのだらう?

不意に田の前がブラックアウトする。でも一瞬のことだった。

「…正解だ。座つてよし。」

心底悔しそうにしながら次のページに入る。周りの生徒のささやかな歓声が聞こえる。

何が起こったのか意味が分からなくなるの、言われたとおりに座る。結局その授業で謎が解けることは無かった。

待ちに待つた放課後。いつもなら机と机の間に座るはずなのになぜ喜べない。テンションがいつもよつと上がらない。

「さよっと禮夜、さつきの授業のときすいにかつたね。かっこよかつたよ。」

そう話しかけてきたのは長瀬由梨だった。ながせやなりいつも意識が無くなつた時の授業だらう。

「いめん、由梨。ボクその時のこと覚えてないんだ。ところがあの時にボクは何をしたの?」

「はあ? あんた覚えてないの? 信じられない。本当に何も? あんた私をはじめようとしてる訳じやないよね?」

「うん。とこりかじれだけ疑うのや。」

禮夜がそういうと、由梨は溜息をつきながら簡単に話し始めた。

「そりや 疑うよ。…まあいつか。教えてあげる。本当信じられないよ、禮夜、あんた悪谷に当たられたでしょ？最初はあんた『惑つてたみたいに見えたんだけど、途中から…何て言うのかな…』そう、急に自信満々になつた感じつていつか…まあそこはいいや。その後、その消された問題の答えを言つたんだけど…その問題が大学生レベルの問題だつたらしいんだよね。だからみんなおおーつて感じで…まあそんなとこだ。」

「つまりボクが大学生レベルの問題をあの授業で答えたと。」

「簡潔に言つとね…てか私ががんばつて言つたことをそんな簡単にまとめないでほしいんだけど？なんかみじめでしょ。あ、それとね、今ほかの学校の女の子が行方不明らしくて……」

由梨の言葉を無視する。別にまとめようがまとめ無からうが由梨に関係する事じやない。それにそんなことは、まったくもつて問題じやない。

問題なのは意識が無い間にあの問題を解いたこと、そしてその記憶が全くないこと。これはどういうことなのだろうか？
しかしどうせ禮夜にとつては得となることだったのだから、別にそこまで気にすることでもない。

「まあ、いつかあ。」

「全然良くない！…」

「何が？」

「全て！」

由梨が勝手に怒っているのを禮夜は眺めていた。何がしたいのだろうか？怒ることによつて、何が変わるのであらうか？

禮夜は思考を止めると荷物をまとめて立ち上がつた。それに合わせて黒く長い髪の毛がかるく揺れる。

「禮夜？あんた何してんの？」

「帰る。」

「はあ！？あんた何勝手に帰ろつとしてんのー？」

またしても由梨を無視して廊下に出る。昇降口まで響いていた由梨の声は聞かなかつたことにしておいた。

禮夜は家に帰る道を歩いていた。禮夜の家はこの辺ではめずらしく和風の家である。何でも昔はこのあたりの大地主だつたらしい。しかし、それも昔の話だ。

「ただいま。」

返事は無い。当たり前だつ。

両親はある事件に巻き込まれ、七年前に他界し、ここまで育ててくれた祖父も去年他界した。

そのためこの家には禮夜一人しか住んでいない。

：一人と言つのとは違うが。一応何人かの使用人が住んでいる。し

かし今は休養をとらせていい。

今日は何もかもがめんどくさい。すぐに部屋に戻り、着替え、布団に入った。

結局あの授業の時に何が起きたのだろうか。

思考を始めるがすぐに中断する。

眠い。

そこから禮夜の記憶は無くなつた。

02 (前書き)

現実逃避をするために投稿しました。

次の土曜日も多分更新すると思います。

ふと気がつくと、部屋の中が明るかつた。いつの間にか眠ってしまったらしい。

時計を見ると六時三十分、朝が苦手な禮夜にしては早い。もうひと眠りしようと思つたが、完全に目が冴えてしまつていて、眠れない。音楽でも聞いて時間を潰そつかと思つたが、充電が切れていた。昨日充電をするのを忘れていた。

しうがなくテレビを見ていたが、面白い番組は無かつた。

時計を見る。今は七時。さつきから三十分しか経っていない。

仕方がないので、ジャージからセーラー服に着替え、学校の用意をし、家を出た。

外は明るかつた。

禮夜はあてもなく外を歩いてみる。

「何で一人の時にこんなに早く目が覚めるんだよ……今日は八時くらいに起きるつもりだつたのに。」

禮夜は朝に弱い。そのため七時半以降に起きるのは、最早日課となつていて。

なんとなく歩いていると、いつのまにか、学校の裏山に来ていた。高校に裏山があるというのも変な話だが、いつもは見ているだけだったが、今日はひょっと探検しようと思つて中に入った。

裏山に広がっている森林は思っていたよりも広く、まるで何かを追悼しているような感じだった。膨大な数の何かを。森林を進むと、奥に洞窟があった。覗いてみると、大人が五、六人くらいは入れそだつた。何故こんなところに洞窟があるのだろうか？何かに使つたのだろうか？

そういえばこの辺は戦争の時の防空壕がどこかに残つていると噂で聞いたことがある。その残骸なのだろうか？まさかこの山自体が戦争の産物だというのだろうか？もしも思つてはいる通りだつたらこの学校は何故こんなところに建てられたのだろうか？

不意に後ろから物音がする。

驚いて振り向くが、そこには何もいなかつた。探りたい気持ちもあつたが、ちょうど登校の時間になつてしまつてはいる。少し恨めしく思いながらも禮夜は裏山を後にした。

登校して数分後、河崎が話しかけてきた。

「ちょっと今時間あるか？」

「あるけど。」

「じゃあちょっと来い。」

何だらうと思いながらも河崎についていった。

しかし、ついていく最中、何故だか不穏な空気がした。何か悪いことが起きる…そう直感したのだ。理屈は無い。ただの思い違い、そう思つたかった。

考え事をしながら歩いていたる、河崎の歩みが止まつた。そして、裏山の前だつた。

「お前、朝じりでただる。」

何故河崎がそのことを知つてゐるのかは分からぬが、不審に思つながらも質問に答へる。

「いたけど。」

「じゃあその辺に洞窟があつたか?」

「あつたけど。それが……」

「どうしたのか?」と続けようとした時、いきなり河崎に殴られる。口の中で血の味がする。殴られたときこちつてしまつたらしく。

「何だよ、いきなり……」

河崎は「ひつひを睨みながら言つた。

「じりじりへんな。」

「は?」

「じりじりはお前が来ていい場所じゃねえんだよ。」

河崎は「いいか、絶対近づくんじゃないよ。」と言しながら帰つて行つた。

禮夜はやつと見たものを思ひ出しながら、河崎のやつとあつた場

所を見ていた。

禮夜は時計を見る。

授業開始まであと五分。今から行かないと間に合わないだろう。しかし、禮夜は時間という概念に縛られるのではない。し

禮夜はためらわず、裏山に入った。

03 (前書き)

いいのといひ、朝寒いですね。布団から出たくなくなります。

朝に行つた洞窟まで行く。むつきと同じ道…一本しかない道を通り、この道を外れれば、ここから出るのは至難の業となるだろう。

朝に来た洞窟につく。洞窟の後ろからは同じように物音がする。何かが動いている音だつた。人間でなければいいのだが。

しかし禮夜の嫌な予想は对外当たつてしまつ。今回もその通りだつた。

物音のした場所、そこには制服を着た女子生徒がいた。と言つても鎖で身体を地面に繋がれていて、目と口には布が巻かれているが。禮夜は素早く布を外す。

「ちよつとじつとしていて。」

禮夜は制服を漁る。スカートのポケットに、小刀が入つていた。禮夜はそれを取り出すと、日本刀のように使って、鎖を切つてしまつた。普通、小刀で鎖は切れない。でも禮夜は剣の達人である。小刀で鎖を切ることなど簡単だ。

女生徒を解放する。ブレザーモードの制服。禮夜の通つている高校の生徒ではないらしい。

「キミ、名前は?」

女生徒は泣いているので答えよつとしない。ここで禮夜は質問を変える。

「一人で歩ける?」

この質問には泣きながらだが首を縦に振り、立ち上がる。

裏山を出て少女を警察署に預ける。親がすぐに迎えにくるらしい。警察からの質問は適当に理由をつけて切り上げた。

警察署から出た時には、すでに一時間目の授業が始まっていた。学校に向かいながら考える。

禮夜の直感は当たつてしまつた。しかし、これだけで終わるとは限らないのだ。もしかしたら何か重大な事件が起こるかもしれない。しかし禮夜には止める力がない。今はそれが起きないことを祈るばかりなのだ。

そんな風に思いながらも学校へと向かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8089x/>

儀式の夜

2011年10月29日15時14分発行